

# 現代日本の建築家の言説にみられる透明性という言葉に投影された建築的思考

A Study on the meaning of the Word "Transparency" as Design Theories by Japanese Contemporary Architects

奥山研究室 07M17108 小滝 健司 (ODAKI, Takeshi)

**1. 序** 透明性という概念は近代主義建築の登場以降、建築の空間を思考する際の重要なキーワードのひとつとして扱われてきたが、1960年代中頃に建築理論家のC・ロウによって著された「透明性—虚と実」<sup>1)</sup>という論文において、初めて透明性という概念に明快な意味の指標が提示された。現代においてもその影響の下に透明性を巡る建築的状況があると考えられるが、透過性を表現する方法が多様化し、また因習化された空間の階層性に対する信頼が揺らいでいる現代の状況においては、透明性の概念がロウの提示した構図からは捉えきれないと言える。そこで本研究では、透明性という言葉を用いて建築の主題が明確に語られる論説を資料とし<sup>2)</sup>、その意味内容を検討することで、現代日本の建築家の空間概念に関する思考の一端を明らかにすることを目的とする。

本研究では、分析例(図1)のように資料となる論説を、建築家が透明性という言葉に対しどのような空間的認識をもつかという「認識」、透明性がどのような視点から捉えられるかという「視点」、そして透明性が実体的にどのように実現されているかという「手法的要素」という大きく3つの水準を設定し分析する。

## 2. 透明性に関する認識と視点

**2-1. 透明性に関する認識** まず資料とした論説から建築家の透明性に対する空間的認識が明確に読み取れる箇所を抽出し、その意味内容をKJ法<sup>3)</sup>により相互に比較検討した(図2)。その結果、複数の空間の関係性について透明性に対する認識を語る【空間の関係に関する透明性】(以下、【関係】)、と空間そのものの透明性に対

する認識を語る【空間の性質に関する透明性】(以下、【性質】)の2つに大枠捉えることができた。【関係】については、関係性が論じられている複数の空間の内容で意味内容のまとまりをつくり、《内部/外部》《手前/奥》《部分/全体》の3つで捉えた。「内と外の区別がないかのように透明に連続させていく」(no.46)のように《内部/外部》の関係性が語られているものには、内外の空間的繋がりに着目するもの、内外の視覚的繋がりに着目するもの、内外の境界の消去に着目するもの、そして内外の混在に着目するものがみられた。また、「空間を透かすことで奥行をもたせる」(no.38-1)のように《手前/奥》の位置的関係が語られているものには、空間の奥行に着目するものと空間の重なりに着目するものがみられた。「エレメンタルな層が多重化されて予測不確定な全体を提示する」(no.12)のように《部分/全体》の関係性が語られるものには、部分による秩序に着目するものや、序列のない全体性に着目するものがみられた。また、これらはno.13,51,82-2の例のように異なる空間を繋げることにについて述べるものと、no.93,44-1,50-2,12,33の例のように複数の空間を一体的なものとして述べるものとの2つに分類でき、前者を〈連結的關係〉(以下、〈連結〉)、後者を〈融合的關係〉(以下、〈融合〉)として整理した。一方、【性質】には「透明なプラトン立体」(no.40)といった空間の無機性に着目するものや、「空間の広がり」(no.102-2)といった空間の開放性に着目するもの、「空間の公共性」(no.71-1)といった空間の社会性に着目するものといった内容がみられた。

<p>「建築家は公園にある木々を額の中に入れ…もち上げられた白い壁は透明性を得るためのオパシテであると共に道路に正面性を与えている。…コーリン・ロウのいう透明性には、虚の透明性と実の透明性がある。実の透明性はモダン建築の基本で、この透明性を抜きにしては語れない。そして透明性には重量感からの開放というモダニズム建築がもつ命題が含まれている。</p>	<p>認識 重量感からの解放 空間の性質</p>	<p>視点 歴史的視点 引用対象 コーリン・ロウ/ 近代主義建築</p>	<p>手法的要素 透過性をもたない要素/ 複数</p>
<p>前面道路からメインのブロックの「<u>2枚のガラス越しに見える遠くの山並み</u>」といった誰の眼にも意識される南北軸、あるいは「<u>文字通りの透明性</u>」と、その南北軸に意識的に対立するよう導入した東西の方向性をもつ要素が相互に関係しながら敷地の中だけでなく、周辺までも含めて秩序化していくのではないかと。そして結果的にはそれが「<u>環境や風景という文脈の中で</u>」概念としての透明性、とでも呼べるものまで昇華してほしい、と考えていた。</p>	<p>認識 内部空間に眺望を得る 関係-連結 《内部/外部》</p>	<p>視点 環境的視点/ 歴史的視点 引用対象 コーリン・ロウ</p>	<p>手法的要素 透過性をもつ要素/ 単数</p>

図1 分析例

No.43-1 リール国際小学校「都市の思想、空間の連続性、透明性」赤堀忍  
No.21-1 風景と透明性(園部SOffice)岸和郎

**2-2. 透明性を捉える視点** 前節で検討した透明性に関する認識とは別に、資料とした論説からは、建築家が透明性について語る際に、着目し参照する事柄を抽出することができる。ここでは特に多くみられた事柄としてC・ロウや近代主義建築など、歴史的な事柄を参照するもの(『歴史的視点』以下、『歴史』)と、「透明感のある、都市的な空気に満ちた空間は、科学情報都市つくばのゲートとして」(no.24)のように都市的、環境的な事柄を参照するもの(『環境的視点』以下、『環境』)の2

つを「視点」として検討した(図3)。その結果、『環境』をもつものが55資料、『歴史』をもつものが39資料みられた。また、『歴史』についてはその引用の対象を検討したところ、C・ロウと近代主義建築が多くみられた。

**2-3. 認識と視点の関係** 前節までに検討した「認識」と「視点」との関係を検討した(図4)。その結果、【関係】の認識において透明性を語る視点をもつことが『歴史』、『環境』ともに多かった。また通時的傾向(図5)をみると、『歴史』、『環境』によって語られるものが90年代から

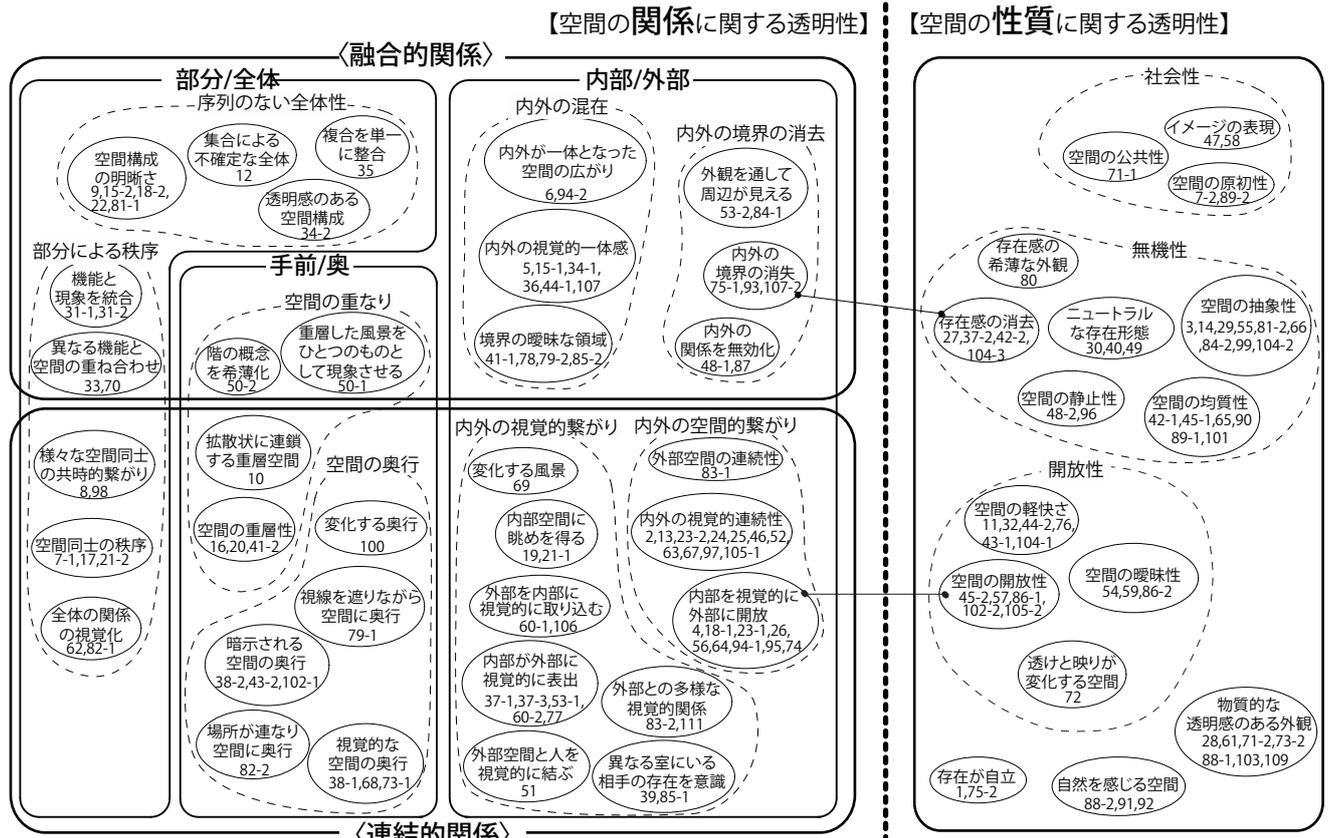


図2 透明性に対する認識の内容

図注) 図中の数字は資料番号を示し、複数の認識が抽出できる場合は、ハイフンに続けて番号を記載している。

環境的視点 △ (55) 都市や自然環境との関係から捉える視点	歴史的視点 (39) 歴史的な文脈からの引用
この透明感のある都市的な空気に満ちた空間は、科学情報都市つくばのゲートとして、また高速で移動する車からヒューマンなスケールへの接点として、人びとが行き来し、集うアトリウムとして機能している。	建物が透明であることは、観念的にも物理的にも、近代以降の建築においてある種の倫理であったように思う。…透明であることは多様なものが同時に存在することを避けてしまう。
No.24 sk9406 伊東豊雄	No.90 sk0703 山中新太郎

図3 透明性を捉える視点

透明性を捉える視点	透明性に関する認識							
	【関係】(94)			【性質】(54)				
	〈融合〉(38)	○●	○●	○●	○●	○●		
環境的視点	41	9	4	24	13	11		
歴史的視点		26	5	6	6	2	7	13
参照なし	32	8	7	2	8	2	5	30

図4 認識と視点の関係

透明性を捉える視点	透明性に関する認識		
	【関係】	【性質】	
	〈融合〉	〈連結〉	
~80s			13
90s	17	26	63
00s	16	25	72

透明性を捉える視点	透明性に関する認識		
	環境	歴史	参照なし
	~80s	14	14
90s	24	14	30
00s	30	20	26

図5 通時的傾向

00年代にかけて増えているが、『環境』については【性質】に00年代のものが多く見受けられることから、「内在化した都市空間」(no.71-1)のように、近年の建築家が都市的な視点をもちながらも空間自身の性質に透明性を認識する傾向があると考えられる。

**3. 透明性に関する手法的要素** C・ロウの提示した実の透明性と虚の透明性という空間に関する対概念は、それを実現する手法的な要素の差異によって特徴付けられている。実の透明性はガラスに代表されるような透過性をもつ素材の特性によって認識されるものであり、虚の透明性は要素同士の配列による関係性によって認識されるものであるといえる。本研究ではC・ロウの対概念をふまえ、透明性に関する手法的要素の透過性の有無とその数といった2つの観点について検討する(図6)。透明性を実現する要素を透明ガラスや半透明ガラスといった物理的な透過性をもつもの(以下、[透過要素])と、透過性をもたないもの([不透過要素])とに分類したところ、資料全体では[透過要素]が多くみられた(89/148)。次に、その要素が単数か複数かを検討したところ、単数のものが多くみられた(89/148)。さらに、透過性の有無とその数との関係から手法的要素を捉え、ガラスのような透過性をもつ素材によるもの[透過要素/単数]、透過性をもつ素材が複数あることによって配列的な関係性をもつ[透過性要素/複数]、透過性をもたない要素による[不透過要素/単数]、透過性をもたない要素が配列的な関係をもつ[不透過要素/複数]といった、4つに分類した。特に[透過要素/単数](71/148)と[不透過要素/複数](41/148)が多くみられ、これら2つは、ロウの提示した対概念の双方と対応する透明性の手法的要素であるといえる。

#### 4. 透明性に投影された建築的思考

**4-1. 認識と視点および手法的要素の関係** 「認識」と「視点」および「手法的要素」の関係(図7)を検討する。前章で捉えたように[透過要素/単数]と[不透過要素/複数]によるものが大きなまとまりとして捉えられる。

まず、[透過要素/単数]の内容をみると、【性質】が他の組み合わせに比べて多くみられ、【性質】の多くがこのまとまりと対応していることから、ガラス等の素材による透過性によって「空間の均質性」(no.42-1)のような空間の性質に関する透明性が認識されることが多いと考えられる。また、【関係】のほとんどが《内部/外部》の関係であることから、透過性をもつ素材による透明性は内外の関係についての認識として捉えられていると考えられる。また、歴史的視点をもつ認識についてその引用対象をみると近代主義建築が多くみられた。一方、[不透過要素/複数]によるものは【関係】が多くみられ、他の組合せと比較して《融合》が多くみられた。また《内部/外部》《手前/奥》《部分/全体》と全ての関係について同数程度みられることから、構成要素の配列に代表される透過性をもたない要素の配列的な関係による透明性は関係の内容が様々に捉えられていると考えられる。また、《融合-部分/全体》《連結-手前/奥》が比較的多くみられ、《融合-部分/全体》では序列のない全体性についての認識をもつものが多くみられた。また、《連結-手前/奥》では、「暗示される空間の奥行」(no.38-2)」というような空間の奥行を感じるものが多くみられ(6/8資料)、C・ロウの引用が多くみられた。

**4-2. コーリン・ロウとの比較** 分析でみられた傾向とC・ロウの提示した透明性とを総合的に検討する。C・ロウは実の透明性について、空間が「互いに流動し合い、互いに融合し合う」と定義<sup>4)</sup>していることから【関係】についての認識であり、《融合》、《連結》の双方で捉えられる。また、虚の透明性はC・ロウによって「成層作用は…虚の透明性の本質である」と定義<sup>4)</sup>され、【関係】の認識であるといえるが、特に《連結-手前/奥》によって捉えられると考えられる。また、手法的要素の内容を考慮すると、前者は[透過要素/単数]、後者は[不透過要素/複数]として位置づけることができる(図7)。一方、C・ロウの定義と手法的要素の異なるもの([透過要素/複数]、[不透過要素/単数])や、認識に

透過性をもつ要素 (89) [単数71 複数18]		透過性をもたない要素 (59) [単数18 複数41]						
No.104-2 sk0903 伊東豊雄 「アクリルは樹脂の中でもきわめて透明度の高い物質で、重合接着によって完全に無垢の巨大なかたまりをつくることができる。」		No.38-2 sk9604 齊藤裕 「建築の諸要素-柱、壁、天井、サッシ、屋根等をすべて同系色で仕上げ、リテラルな透明性を獲得するなどの操作により現代的な質を保ちながら、古典性に同調する空間を提案した。」						
透視性をもつ素材 (t)	透光素材 (l)	構成要素 (c)			表現 (a)	尺度 (m)		
ガラス アクリル ガラスブロック 透明スクリーン	エキスパンドメタル パンチングメタル ステンレスメッシュ	半透明膜	形徳同士 場 建物 要素	格子、立体格子 架構の配列 障子 家具 建具	柱による構成 木組 構造形式 原理	中庭 光庭 ピロティ トオリニワ	ピュアな形態 曲面 幾何学 最小限の部材 要素の統一表現	スケール 距離

図6 透明性の手法的要素

において異なるもの(【性質】)、さらに手法的要素は虚の透過性の範疇に捉えられながら認識において異なるものといった、ロウの定義から想定されるものとは異なる思考が多くみられた。また、C・ロウとの比較による手法的要素の通時的傾向を捉えると、90年代以前には虚の透過性と同様に透過性をもたない要素による透明性の認識が多く、00年代以降では実の透明性と同様の透過性をもつ要素によるものに透明性が思考されることが多いが、00年代以降では透明性の認識において実の透明性とは異なるような空間の性質に透明性を認識することが多くみられる。このことは透明性という空間概念がロウの提示したものでは捉えきれない、輻輳化したものであるということがいえる。

**5. 結** 以上、建築家の言説を対象に透明性という言葉に投影された建築家の思考について検討した。建築家の透明性の認識においては、関係に関するものと性質に関する透明性として大枠2つで捉えられ、更に関係の内容として内部/外部、手前/奥行、部分/全体という3つのまとまりを得た。透明性の認識と手法的要素との

関係から、透過性をもつ素材による透明性と素材の配列による透明性の大きく2つのまとまりがみられ、前者が内/外を基本とした関係の内容をもつものに対し、後者は様々な関係の内容をもつことを見出した。さらにC・ロウの定義との比較から、実の透明性によって捉えられるものが多くみられる一方で、手法的要素としては虚の透明性の範疇にありながら、それだけでは捉えきれない認識が多くみられることをいくつかの指標により示した。またそこでみられた通時的傾向は、現実の空間の構想に際して、透明性という空間概念が今後の建築家の言語活動に対しての指針を示し得るものと考えられる。

- 注:
- 1) 初出: Transparency: Literal and Phenomenal, Perspecta 8, pp. 45-54. 1963
  - 2) 資料は、1975年以降の「新建築」、「住宅特集」から、論説の中に透明、透明性という言葉が重要なものとして明確に語られている111資料、148資料単位から分析を行っている。
  - 3) 川喜田二郎:「発想法」(中央公論社)のKJ法を用いている。
  - 4) 透明性の定義は、1963年にC.ロウによって執筆された<Transparency:Literal and phenomenal>という論文を基に原文が翻訳されたもの(A+U1975年2月号及び、C・ロウ「マネジリスムと近代建築」彰国社1981を参照している。  
 実の透明性(Literal transparency):but at the Bauhaus glass walls "flow into one another", "blend into each other", "wrap around the building" and in other ways(by acting as the absence of plane) "contribute to that process of loosening up a building which now dominates the architectural scene" 虚の透明性(Phenomenal transparency): "stratifications devices by means of which space becomes constructed, substantial, and articulate,are the essence of that phenomenal transparency"

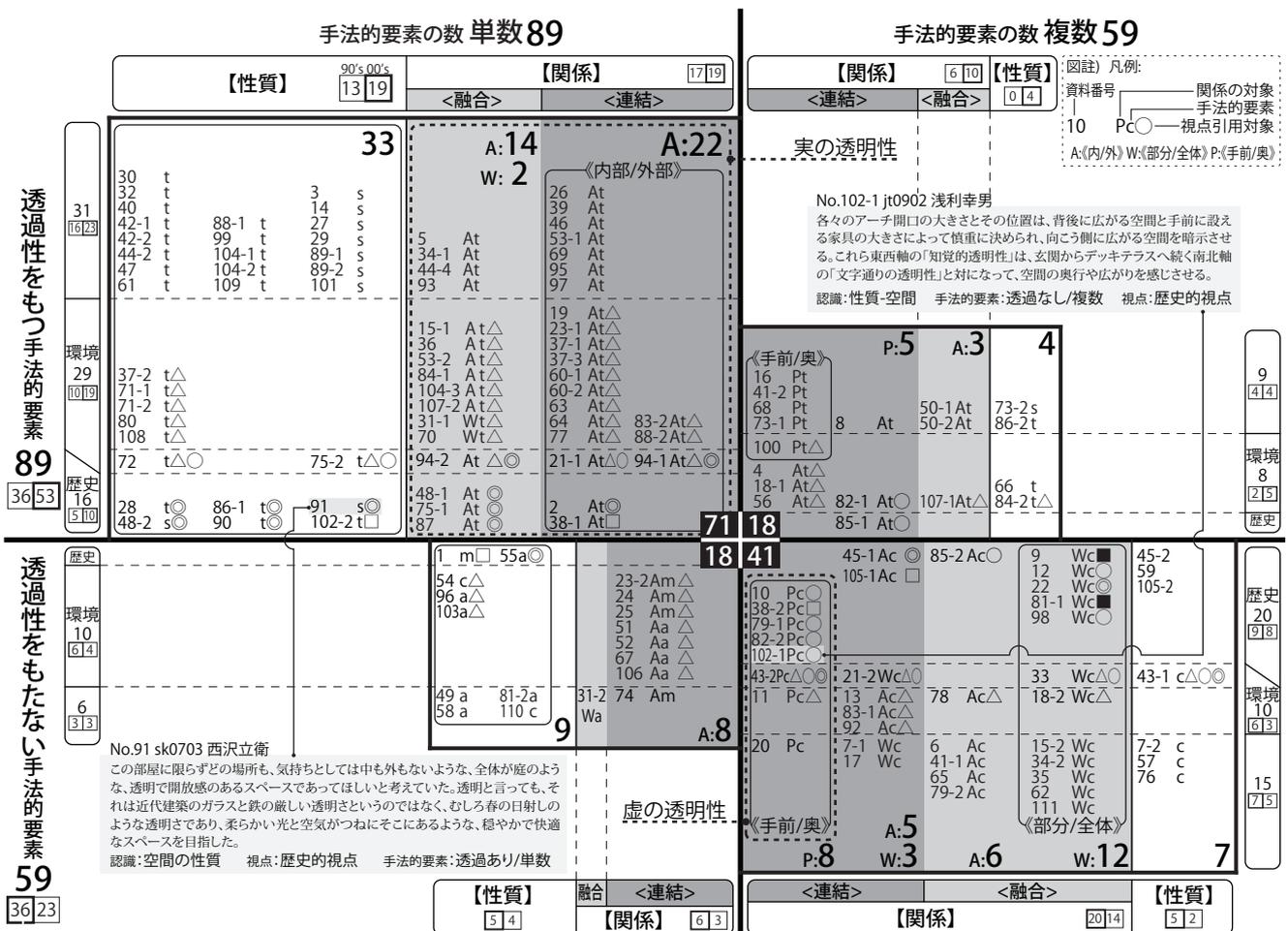


図7 認識と手法的要素の関係